

二〇三三年二月一日

雨春や畝黒々と艶めきて  
夭折のちひさき墓に春の雪  
春泥に思はずたたら踏みにけり  
さざなみと見しは水面の青柳  
鞆の指挟み置く帳簿かな  
熊笹が匆ね返しをるなごり雪

二〇三三年二月九日

色づきし蕾黙して寒戻り  
畦条里みせ雪残る千枚田  
梅東風に祈願の絵馬の十重二十重  
愛のチョコあどけなき字の感謝状  
歳時記を開き居眠り春炬燵

二〇三三年二月八日

赤銅の春月に胸さわぎけり  
春禽の一擲したる水面かな  
薄氷を踏まずにをれぬ登校子  
神木の手入れをすれば鴟の贅

二〇三三年二月七日

寒もどり散歩をしぶる犬に喝  
完璧に筋とりきつてみかん食ぶ  
繰り出せる糸の限りや凧  
飛び石の靴跡しるき別れ霜  
ポストまで軒下づたひ春時雨  
花鋏取り落としたる余寒かな

二〇三三年二月六日

雲梯に反る吾子の髪風光る  
たんぽぽの絮まんまるの小宇宙  
老い母の寝顔はきつと春の夢  
側溝をたばしりをどる雪解水

二〇三三年二月五日

出船はや沖の霞に消えにけり  
産土神に祈りて鋤を打ちはじめ  
梅東風をとらへ孤高の鳶となる  
園の木々芽吹くを告ぐる試歩の夫  
ふらここに隣りし友が恋敵  
漬物を手皿で受くる春炬燵

二〇三三年二月四日

校門に最敬礼し卒業す  
老いの齒はまだ健在よ年の豆

毎日句会みのる選・二〇三三年二月二日

明日香 明日香 澄子 せいじ せいじ 素秀 素秀 董雨 ひのと  
むべ たか子 素秀 ひのと 素秀 董雨 素秀 董雨 董雨 董雨  
はく子 明子 明日香 せいじ せいじ 素秀 素秀 董雨 董雨  
みきお みきお 澄子 せいじ せいじ 素秀 素秀 董雨 董雨  
はく子 明子 明日香 せいじ せいじ 素秀 素秀 董雨 董雨  
はく子 明子 明日香 せいじ せいじ 素秀 素秀 董雨 董雨

よう子 はく子 あひる こすもす  
きよえ かし むべ たか子 ひのと ひのと  
みきお 満天